こんにちは金田です

21世紀は東アジアの時代

中嶋嶺雄氏（東京外国語大学教授）
VS.
金田博夫（サンスター社長）

国際化時代といわれて久しいが、日本はともすれば欧米偏重になりがちでした。が、近年、国際経済の地図もかなり変りつつあります。この調子でいくと、二十一世紀の経済をリードするのは、日本、台湾、韓国だ、とおっしゃるのは、国際関係論で活躍がめざましい中嶋嶺雄氏。

なぜそうなるのか、アジアの近隣諸国との関係は、そして、真の国際化とは、といったことについて、ご意見を拝聴しました。

新しい中国に惹かれて

金田　近年は、日本人の中国への関心が非常に高まっていますが、三十年前に中国を研究しようとする人は少なかったと思います。どういうところから、この地域に関心を持たれたのでしょうか。

中嶋　私が中国をはじめたのは、中共といっていたころです。実は、私は信州松本の薬局の一人息子なんですが、私が中国語をやり中共研究をやることには、周りから非常に抵抗がありました。何しろ中共といえば八路軍の延長みたいに考えているのですから。今でこそ中国は、新聞でも大きく書きますが、革命が成功して、中華人民共和国ができたときは、日本の新聞でさえほとんど、ベタ記事（一段の小さな記事のこと）でした。

ところが、私は多感な高校時代でして、当時の中国はものすごく大きな問題を提供しているのではないかというふうに考えました。当時は、中国とか、インドもそうでした。インドの希望の星だといわれたネールが出てきたし、そして周恩来の中国、その目覚ましい中国に惹かれましてね。これは将来大変なことになるのではないかということで、それにはまず語学をやろうと、それで外語大に行きまして、それから東南アジア国際関係論を勉強したという経歴です。

金田　そうですか。国際関係論の講座のある大学はまだ少いようですね。

中嶋　これほど国際化とか、国際関係ということが言われながら、国際関係論という分野が講座として存在する国立大学は、五つか六つしかありません。私は、大学では国際関係論を教えていますが、とくに大学院では地域研究です。中国にしても、東南アジアにしても、いろいろ個性がありまして、その民族や国のにおいをかぐところからとらえていくのが地域研究です。こういう分野はまだまだ未確立です。

金田　日本人が国際化という場合、今まではともすれば欧米との関係を中心に考えていたきらいがありますね。

中嶋　学問の世界でも、依然として欧米の枠組みで近代化を扱って、そのままが大学の講座になっているわけです。その点、諸外国ですと、例えば一番わかりやすいのはキッシンジャーです。キッシンジャーはハーバード大学の国際関係論の先生でした。アメリカに行けば、どこでも国際関係論は当たり前になっていますが、まだ、それが日本ではそれほど重大になっていないのです。

それは、ある意味では、既成のアカデミズムに対する挑戦になります。われわれからみると、語学や政治学や経済学だけを幾らやっても、中国の勉強をしたり、アジアを分析するときには、それだけで役に立たないだろうという疑問があるわけです。もう一遍、国際関係論の研究という分野から、現実の、現地の状況に即して分析してみると、従来の学問ではわからないことがわかってくるのではないかという気がしました。そういう意味では、これからはまさに国際関係論とか、地域研究が大いに重視されなければいけないと思います。

急成長の東アジア

金田　初めに中国を研究なさって、現在は、二十一世紀は日本・台湾・韓国だ、という論に至る過程はいかがですか。

中嶋　中国には期待がすごく大きかったんですが、ご承知のように、中国はそう簡単に近代化できる体質を持っていないんですね。

確かに、中国は最近、毛沢東時代とは違って、大きく開かれてきつつあり、この潮流は逆流させることはできないと思いますが、ただ、中国は、今、たくさんの深刻な問題を抱えています。

例えば、人口問題一つをとっても大変な問題で

す。十億人と言うけれども、実際には十億を超えているし、放置しておくと、たちどころに二十億人ぐらいになってしまいます。そうすると、生産を幾ら四倍にしても、一人当たりのGNPないしは国民所得はふえないから、全体的に底上げするというのは大変な課題で、われわれが考える近代化というところまでいくにはずいぶんかかります。その辺の本質がわからないから、最近、日本の企業も中国のマーケットにラッシュしていますが、なかなかそううまくいかないわけです。

ましてや、中国人は日本と経済的なギャップがありますから、逆に何とか日本から儲けようと思います。儲けることにかけては、日本人以上に商才にたけた民族ですから、そこと取り引きして儲けること自身が、なかなか難しいわけです。それ以前に、中国の経済の基盤が脆弱だと思います。

そこへいくと、中国の周辺のアジアの国々はすごく急成長です。今、中国は一人当たりのGNPが約二百五十ドルとか、三百ドルと言われていますが、台湾はその十倍以上で、去年は、一人当たり三千ドルまでいきました。

中国は、ようやく今世紀末に、すべて順調にいって千ドルぐらいです。それも人口がちょっとふえれば、一人当たりのGNPはそれだけいきません。一人当たりのGNP二千ドルというと、今の日本の豊かさの五分の一ですが、中国の指導者自身の推計でも、それになるのは、二十一世紀の半ばごろです。

金田　なるほど。

宮嶋　実は、一人当たりのGNP二千ドルというのは非常に重要なポイントで、大体、二千ドルぐらいを超えると、その社会が落ち着いてきます。例えば、どういう現象が起こるかというと、一般の国民が貯金をしようという気になります。明日どうなるかわからないということでは貯金しません。今の中国は、貯蓄率がものすごく低いんです。

その点、台湾とか、韓国とか、NICS（新興工業国）と言われる中進国を見ていると、二千ドルぐらいの壁を超えるあたりから貯蓄率が高くなって、何となく社会が安定し、豊かになってくるわけです。そうするとどういう現象が起こるかというと、例えば、普通の人が海外へ旅行できるということが起こってくるわけです。日本も、海外旅行が自由化されたのは、たしか昭和三十九年ぐらいだったと思います。

普通の人が海外旅行できるというのは、市民の社会的な成熟、いわば近代化の第一ハードルだと思います。台湾や香港などはそうなってきました。

金田　日本へもたくさん旅行者が来ていますね。

上位は、日本・台湾・韓国

中嶋　香港、シンガポールのGNPが六千ドルぐらいで、東南アジアではトップでしょう。あとは韓国が二千五百ドルぐらいです。それが、今世紀末にどのぐらいまでいくか、大体推計できます。

日本は約二万ドルぐらいになり、経済の面では、文字通り世界で一番豊かになります。その次が台湾がくるのではないかという気がします。台湾は、今、一人当たり三千ドルですが、このまま成長すれば三倍の一万ドル、韓国も八千か一万ドル近くなるのではないかと思います。それから、香港、シンガポールはかなり高いですから、大体、八千ドルか一万ドルぐらいは間違いありません。

ただ問題は、香港もシンガポールも、国として考えるにはサイズが小さすぎます。これは、私の仮説ですけれども、一人当たりのGNPが二千ドル、人口が千五百万人ぐらいになると国としてまとまってきます。ところが、香港もシンガポールも小さな都市国家ですから、成長させようと思えば政策的にぐっと成長しますが、国内市場が小さく、余りにも対外依存度が高すぎて、外の景気が

中嶋嶺雄（なかじまみねお）氏の略歴

昭和11年、長野県生まれ。35年、東京外国語大学中国語科卒。40年、東京大学大学院国際関係論課程卒。現在、東京外国語大学教授。社会学博士。この間、外務省特別研究員（在香港）、オーストラリア国立大、パリ政治学院客員教授などを歴任。著書は、「北京烈々」（サントリー学芸賞受賞）、「現代中国論」、「中ソ対立と現代」、「香港、移りゆく都市国家」、「21世紀は日本・台湾・韓国だ」、「日本人と中国人ここが大違い」など多数。

悪くなればがたがたするわけです。そこへいくと台湾や韓国はちがいます。

韓国の場合には、急成長をしすぎたために、対外債務を七百数十億ドル抱えておりますけれども、これは、恐らくソウルオリンピックを乗り越えて、政治も少しずつ民主化されていき、対外債務も一九九〇年ぐらいには返済のめどがつくのではないかと思います。

そうしますと、アジアの中で残るのは、日本を先頭にして、台湾、韓国ということになります。

金田　なるほど。それで、二十一世紀の世界の経済の中心的な担い手は、日本、台湾、韓国だというわけですね。

中嶋　これは意外に気づかれていないのですが、今、アメリカの貿易の大部分は東アジアです。従来はヨーロッパとの貿易が第一位でしたが、一九八三年を境にして、東アジアとの貿易が第一位になっています。しかも、アメリカにとって深刻なことは、貿易相手である日本、台湾、韓国に、農産物を売って、機械や先端技術を買っているのです。

だから、貿易摩擦も日本だけではないわけです。例えば、台湾は昨年、アメリカとの貿易で百三十億米ドルも稼いでいますが、何で稼いでいるかというと、バナナや砂糖というのは以前の話で、今や台湾でつくったマイクロエレクトロニクスとか、そういう先端技術がアメリカで売れています。恐らく、韓国もそれを追っていくパターンになるのではないかと思います。

例えば、最近注目されているポニー(韓国産自動車)、今、カナダに出ていますが、大変評判がいいんです。やがて、韓国の車がアメリカに行くのではないかと思います。

金田　そうなるでしょうね。

儒教文化圏が強い

中嶋　ここには二つの大きな問題があって、一つには、日本、台湾、韓国は、従来は反共イデオロギーの冷戦政策、ダラス外交の担い手だというイメージがありましたけれども、今やそういう時代ではありません。台湾も、大陸反攻ということを言っているわけではないし、韓国も、北朝鮮と両方でオリンピックをやろうなんていうことを言う時代です。いわばイデオロギーよりも経済で動いている時代です。従来の既成の学問の理論を現実が越えてしまっているんです。

例えば、マルクス主義は、社会主義になれば工業化も成功するといいましたが、これは、完全にだめだということがわかったわけで、逆に言うと中国は社会主義だからだめなんです。ソ連もそれで悩んでいると思います。

金田社長　　中嶋嶺雄氏

ところが、マックスウェーバーは、近代化に成功して工業が発展するのはプロテスタントの国であり、そこに資本主義が発展するという理論です。彼は、儒教ではだめだと言うんです。ところが、現実にこれらの地域は、マルクス主義でも、プロテスタンティズムでもない、大きくくくれば儒教文化圏です。儒教文化圏として成功しているわけです。

金田　たしかに儒教文化圏ですね。

中嶋　われわれは知らず知らずのうちに儒教的な倫理の中に生きていますが、そのことを自覚しないくらい緩やかな生活規範です。これが、企業を経営したり、とくに小集団をつくっていく上でプラスに作用していると思います。

小集団が互いに競い合うが、結果的には全体のパイが大きくなって、全体を活性化することになる。この儒教的な規範は、決して近代化とか、工業化の束縛にはなっていません。

金田　周りとの調和、秩序を保つなどはプラスになっているでしょうね。

中嶋　日本、台湾、韓国を儒教文化圏としてとらえたら、儒教が経済にどういう役割を果たすのか、実はこの問題を、来年から、私が代表になりまして、かなり大がかりなプロジェクトを日本でも文部省の重点領域研究で進めることになっております。これは、最近、欧米の学者の間からもときどき問題にされております。

金田　そうですか。

中嶋　これにもう一つつけ加えると、これらの地域は、教育水準がすごく高いわけです。アメリカも、欧米も教育水準は高いけれども、例えば、アメリカの農村で国際問題の講演会というのはありません。ヨーロッパも同じで、フランスの田舎

で国際問題の話をしてもちんぷんかんぷんです。ところが、日本や、台湾、韓国というのは、地方に行っても、国際問題を話せる人がどこにでも存在するような社会です。いわば、知識水準が平準化しています。

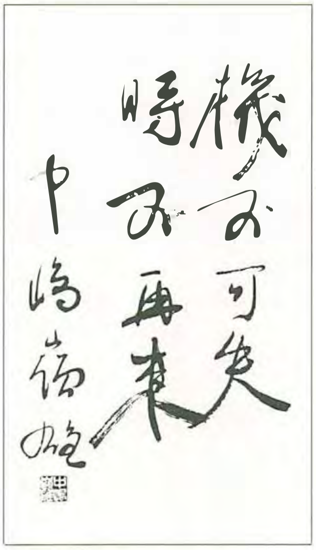
このことが、どうもこれからの情報化、産業化社会というものに非常に大きな意味を持ちます。ある意味では儒教文化圏の人たちは学習志向です。

金田　儒教と経済を結びつけるのはおもしろい見方ですね。

中嶋　私もずいぶんあちこちの国を歩いていますが、例えば、インドネシアとかのイスラムの世界はちがいます。実は、一年間、ホームステイでインドネシアの学生を預かっていますが、その学生を見ていますと、非常に優秀ですけれども、とにかく敬虔なイスラム教徒ですから、ラマダン(断食月)をしたり、まだ若いのに、宗教というものが彼らの生活をものすごくとらえているわけです。

金田　宗教戒律をよく守っているのですね。

中嶋　これを見ていると、近代化、工業化には宗教戒律が自縛になるのではないかと思います。インドも貧富の差、カースト、ヒンズーの世界というのはものすごい自縛ですから、大変なところです。



「機は失うべからず
時は再び来らず」

成約の少い中国貿易

金田　近年、中国の古典や諸子百家の書が、経営参考書のような形で説かれたり、経営者の間でも、それを読むのがちょっとしたブームになっていましたね。

中嶋　経営者が帝王学の教訓として、中国の古典を読むのは大変結構ですが、それだけで現実の中国をとらえると、やはり間違います。

金田　教訓としてとらえるのと、生活の中にしみ込んだ儒教的な生活規範とは、ちょっとちがいますからね。

中嶋　中国へ行って、万里の長城を見て、雄大なスケールに圧倒されたり、シルクロードの遺跡を訪ねてロマンチックなイメージにひたることはできますが、それで今の中国をとらえると間違うように、訓詁的な懐古趣味に終らないように、儒教を考えてみたいと思っています。

金田　政治、経済、文化、さらには民族的な問題など、どういう視点でとらえるかがむつかしいところですね。

中嶋　日本人が中国を考える場合、中国文化の影響を受けてきたという心情的なロマンの中で考えがちですが、日本と中国とはずいぶん長い間、ちがった文化をつくってきました。例えば、中国には喫茶の風習はありますが、茶道のような美意識を追求するのは日本人の創造ですし、中国のシンメトリーの美に対して、アンバランスの美を求めるいけ花も日本独自のものです。

だから、そういうところから、一辺立ち戻ってみた方が、よく中国がみえてきます。

例えば、人口問題がそうですが、中国は、人間が住める居住空間は、ちょうど日本列島全体の三・七倍ぐらいしかなく、あとは人間が住めない、不毛なところです。そんなことが意外に知られていないわけです。

中国の森林被覆率、緑に覆われている所は全土の一二%しかないんです。(日本は七〇%)そこに日本の十倍以上の人口がいますから、どこへいっても人がひしめいているというのが現実の姿です。

金田　そうですね。

中嶋　それから、日本人とちがった政治文化をもっていて、非常に息の長い考えかたをする民族です。最近数年間で、中国がちょっと変わったからといって、すべてが変わるというわけではなく、そう簡単には変わらない世界だと考えたほうがいいようです。共産主義の中で万元戸を認めることに批判も出ているし、今後も右へ左へ蛇行が続くと思います。そんな中で、中ソ関係はよくなっていくでしょう。やはり中国は社会主義、共産主義の国だということをもう一辺考え直してみなければいけないと思います。日本人は、ここのところ日中友好の余り、中国の本質を見失っていたのではないかという気もします。

金田　昨年や一昨年は、日本から中国への車や家電製品の輸出がさかんだったようですが、今年は急に中国貿易が下火になっていますね。

中嶋　今、日中経済関係の商談上のトラブルが約一千億円ぐらい残っているはずです。契約したけれども、そのまま契約が進まないんです。だから、日本側の企業の中には、幾つか設備投資をして、今度は倒産に追い込まれるというケースがずいぶん出ています。

日本のジャーナリズムも、中国を過大に報道しすぎて、商談があったぐらいでも大きな記事にな

りますから、ワッと売れているようなイメージを抱くわけです。われわれの研究室で調べていますが、製品が順調に受け渡されて、代金が支払われるケースは非常に少ないです。

金田　中国と、台湾・韓国とはちがうでしょう。

中嶋　根本的にちがうと思います。

データ的に言いますと、貿易総額からすると、台湾は、中国大陸全体に匹敵するような経済をこのアジアで動かしているわけです。約五百五十億米ドルぐらいの経済が動いています。これからは台湾の経済の方が上になると思います。人口は千九百万人ですから、中国大陸の六十分の一ですが、ほぼ同じ経済を動かしていて、外貨準備は日本にあと三十億米ドルぐらいまでになってきまして、お金があり余っているようです。

ですから、最近、いろいろな企業が台湾に再びカムバックしてくるのは当然です。台湾は、外貨準備で言えば、世界第四位です。そんなことは、余り知られていないのではないでしょうか。

日本に学び追いあげる国々

金田　日本は、かつてアジアの国々と不幸な関係がありましたが、現在、日本をどう見ているかが、やはり気になりますね。

中嶋　日本に対してはかなり期待が高いことは言うまでもありませんが、従来、それと裏腹に反日感情がありました。確かに、日本の企業がずっと東南アジアに出ていきすぎたこともあったと思います。しかしながら、その辺をよく見てみると、ここ二、三年の間にずいぶん変わってきています。

というのは、従来は、日本に対する警戒が必ず出てきましたが、日本は軍事力や何かでアジアを制覇する存在ではないということは、この間の日本人の努力によってかなりわかってきたと思います。ですから、その点での安心感は、かなりアジアの中に定着し始めていると思います。

シンガポールは従来から非常に反日感情が強いところですが、そこで「日本の経済に学ぼう」ということが、スローガンになったり、マレーシアも「Look East」ということを言い始めました。それから、台湾の近代化に、日本の教育制度、つまり植民地統治でいい面を評価しようではないか、という意見が出始めているわけです。こういうことを見ると、日本はそれだけにしっかりしていかなければいけません。日本が、これらの国とともに世界のリーダーになっていくわけですから、それに見合った対応をしていかなければいけないわけです。これからが、本格的な国際化時代ではないかと思っています。

金田社長

金田　今、日本人が東南アジアの方に向かって見る場合は、国際分業と言えば形はいいんですが、実際には日本のコストダウンのための便宜的な考えであったりという面があったと思います。これからはそういうことではすまされない。

中嶋　そうです。恐らく、アジアは垂直分業の時代から水平分業の時代になっていきますし、これらの諸国のキャッチアップの速度が速いので、ますます一種の水平分業、お互いの相互依存関係をいかに増大させていくかということが必要になってくるのではないでしょうか。

理想は東西の相互浸透

金田　日本人はアメリカやヨーロッパの国々にはずいぶん多くいますが、アジアの国々、例えば韓国には千四百人しかいないそうだし、シンガポールは二万四、五千人、台湾も多くないようですね。水平分業などで相互関係をもっと増幅しなければいけないといいながら、案外、人が少ないですね。そこに何か歴史的な感情があるように見えますが。

中嶋　もやもやした感情があるんですね。しかし、これは逆にそんなに心配しなくてもいいんではないかと思います。つまり、近い者同士は、これ以上近づいてはまずいという一定の生理空間があります。動物もそうですが、同じ者同士が余り近寄ると拒絶反応を起こすことがありますから、やはりアジアの儒教文化圏の中には、余り日本人の集団ができない方が私はいいと思います。

例えば、韓国に日本人のコミュニティがすごくふえたならば、やはり韓国の人たちの国民感情を刺激します。同じことは、台湾についても言えるわけです。かつてここは日本の植民地でもあったわけですから、そういうことを我々はもうちょっと意識していかなければいけません。

ただ、問題は、日本がそれらの国と一種の運命共同体的連帯感をどれだけ持てるかということが重要なポイントではないかと思います。

金田　シンガポールなど、ここ数年、非常に速いスピードで先進国のものを導入し、まるで西欧

のミニチュアという感じがしますね。

中嶋　欧米的なものを全部否定してアジア的なものに回帰せよ、といえば、アジア人優越主義という黄禍思想になり、これでは困ります。欧米の文化が普及したのは、それなりに普遍的な価値があったからで、そういうものはもっととり入れていいわけです。ただ、そこに、伝統なり土着的なものが、どういうふうにミックスされて新しい文化をつくっていくかが、今後のアジアの課題だと思います。だから、国際化というのは何でもバターくさくなることではなくて、それなりに開かれた個性、開かれたナショナリズムが必要になってくるのではないかと思います。

逆に、今度は欧米の方にもかなりインパクトを与えているわけです。現に、今アメリカでは、カリフォルニアが脚光を浴びています。ここにはアジア人が多くいて、アジア人の生活スタイルや活力が、カリフォルニアにいるアメリカ人にかなり影響を与えているようです。そういう相互浸透の時代が一番理想的ではないかと思います。

日本というと、いつも、能だとか歌舞伎とかの伝統芸能だけだという時代ではなくて、日本は欧米から受け入れたものを消化しながら、それを逆に出していく。日本の科学技術がそうです。こういう一種の土着的なものを通過した上での新しい創造、文化とか、ビジネスとか、いろいろな分野に今後も出てくるだろうし、そうなったときに本当にアジアというものが意味を持つのではないでしょうか。

大切な草の根の国際交流

金田　ビジネスには国境はないといいますが、どんどんビジネスが先行しますと、国と国との関係は、貿易収支の問題一つにしてもぎくしゃくしてくるようです。今までは政経分離でうまくいっていたのが、何となく政治の世界がぎくしゃくしてくると、ビジネスの面にも響いてくるという心配があります。

中嶋　従来、こんなに経済で矛盾や対立があったら戦争になったところです。それが、そうでないというところが日米関係の新しいところで、そこには経済の論理だけではなくて、国家と国家の信頼感がありますし、民族と民族との一つの連帯感がありますから、そういうことが非常に重要になっていくでしょうね。

中嶋嶺雄氏

国際関係を大きく分けると、政治、経済、文化の三つから成り立ちますが、政治、経済だけが国際関係ではない。まさに文化交流とか、留学生を受け入れるとか、グラスルーツ（大衆によって行なわれる）の国際交流をするとか、その分野がもっと活発になってこなければいけないのではないでしょうか。そのことによって、初めて政治経済のアンバランスが調整されていくという気がします。

これからは、ほんとうの異文化交流をしていくことが必要だと思います。合弁企業をつくったりすることもいいんですが、それよりも、例えば、留学生を一人でも多く受け入れるということが必要でしょうね。

金田　そういう点では日本は、国際的な役割を今まで充分果たせていませんね。

中嶋　だから、私どもも、いつもそれをいらだたしく思っているのです。例えば、国際関係論の講座をどんどんつくって外国人の教師を招く。アメリカ経済を日本人が教えなくてもいいんです。また、全国の中学や高校には、必ず一人は外人の英語の教師を置けばいいわけです。それは、一石二鳥です。日本の貿易黒字を減らすことにもなりますから。

金田　そういうことですね。文化交流となるともっと個人単位、市民レベルでもできることがありますね。

中嶋　今、各地にそういうネットワークができつつありますが、これはもっと進めていいと思います。これからは、柔らかい個人主義の時代で、お母さん方が子育てが終わって何をするかというときに、カルチャーセンターに行くのもいいけれども、そういう外国との交流に尽くすというボランタリーな活動をしていただくといいと思います。

金田　市民レベルで、そういうことが気軽にできることが国際化でしょう。

中嶋　日本社会はそういう意味では非常に外国人が入り込みにくい社会だと思います。

日本はこれだけ経済が豊かになりながら、亡命者でさえも受け入れていないというところが非常にアンフェアですから、そういうところを含めて日本はこれからやることがまだあると思います。

金田　お説のように日本が二十一世紀のリーダーとなるよう、私どもも努力いたしましょう。本日は、どうもありがとうございました。

あなたとサンスター

NO 1986 82

四季の彩

花野

神が手を置きしぬくさの花野の日　朱鳥

万葉歌人・山上憶良が歌でかぞえた秋の七種は、萩、尾花、葛、撫子、女郎花、藤袴、桔梗。いずれもはでやかな花ではない。秋の野には、まだまだいろんな花がある。野菊、龍胆は、まだしも人目をひくが、吾亦紅、釣船草、露草、犬蓼、杜鵑草、水引草などなど。中には、背高泡立草のように強い帰化植物もあるが、日本の在来の野の草花は、ひそやかなものが多い。この秋の千草の花咲く野を、俳人は「花野」と呼ぶ。

友情を心に午後の花野径　　蛇笏

静かな花野の中にいると、人は心安らぎ、内省の時をすごすこともできる。

あれこれを思いはずれる花野かな　文草

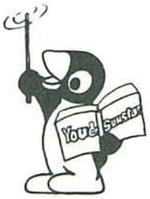
ひそやかだけれど、一つ一つを見ると、天然の造化の妙に心うたれ見飽きることがない。しかし、その秋の草花は、やがてくる冬が、そう遠くないことを、思いおこさせもする。その自然の摂理を、誰も拒むことはできない。

召されなば花野このままさまよひて　柯城

寸陰惜しむべし

一銭は軽いけれど、これを重ねると
貧しい人を富める人にする
だから、商人は一銭を惜しむ
ほんの短い時間は気づかないものだが
これをつづけていると、すぐに命終わる期がくる。
遠い先の日月を惜しむことはない
ただ今を、むなしく過ぎることを惜しむことだ。

（徒然草より）



あなたとサンスター　No. 82　もくじ

四季の彩――花野……1
健康を考える――アゴがあぶない……2
こんにちは金田です――ゲスト・中嶋嶺雄氏……6
日本のまつり――佐賀・伊万里トンテントン……12
小売店経営のアドバイス――チラシ広告を効果的に……16
変貌する消費者――働く女性の満足度と消費行動……18
新製品紹介……20
繁盛店訪問――鹿児島・新生堂薬局／札幌・札幌ドラッグストアー……22
お知らせ……24
サンスターグループニュース……25
ツーウェイ……25

表紙　　コスモス

絵　おかだ　かずよし

文　宮城まり子

コスモスの花が、ゆれています。コスモスの花は、弱いようで強いです。風のあった朝も、元気にしていると、やさしいから、風のとおりに、ゆれるので、折れないのかナ、と思います。やさしいって、強いのですね。